

西田幾多郎と元良勇次郎

—初期西田の「心理主義的」立場における元良の思想的影響に関する一考察—

Kitarō Nishida and Yūjirō Motora: An Examination of Motora's Philosophical Influence
in Nishida's Early Thought as 'Psychologism'

田口 玄一郎 Genichirō Taguchi

(自由学園最高学部(大学部))

本発表では、西田幾多郎と心理学者・元良勇次郎(1858-1912)の思想を比較する。両者の比較を通して、元良が初期西田の思想形成に影響を与えた可能性、及び元良から西田へ批判的に継承された哲学的問題の所在を明らかにすることが本発表の目的である。

西田は東京帝国大学選科生として学んだ時期(明治 24~27 年)に元良の講義を聴講した可能性があり、両者の関わりについてはこれまで指摘されてきた。本発表ではまず、西田の処女作『善の研究』の中で表明された「純粹経験」とその「意志」概念に対応する元良の思想について確認する。西田は「真の意識統一というのは…知情意の分別なく主客の隔離なく独立自全なる意識本来の状態」と述べているが、同時期の元良もまた「実験心理学」と禅仏教の修行の方法の共通性を手がかりとして独自の意志論を深化させつつあり、その到達点の一つとして「自全経験」という概念を提示している。本発表では両者の経験概念を比較しながら共通する特徴と相違点を明らかにする。

本発表ではまた、『善の研究』の「版を新にするに当って」(昭和 11 年)の中で西田がみずからの初期思想を「心理主義的」立場であったと批判的に回顧した点にかつて親炙した元良への批判的応答があった可能性を考察する。「行為の世界と考えられるものは主客を包むものでなければならない。かかる世界の主体は単に主客合一というものではなくして、弁証法的に自己自身を限定するものでなければならない」(「行為的自己の立場」)などの説明にみられるように、西田の初期思想に対する自己批判のベースには後期の行為論があったと考えられる。他方、元良がその意志論の展開の中で構想した「系統学」(systematology)では「事物や観念を一つの完全体」とするための論理的構造への志向があったことが確認できる。

「中枢」と「周囲」という二つの軸から構造化される「意志系統」という元良のアイデアは後期西田の弁証法的世界の構造に基づく行為論と比較されうるものであり、初期の「心理主義的」立場を自己批判することを通して西田が乗り越えようとした問題の基本型の一つをそこに見出すことができると考えられる。